

ヨハネによる福音書12：9～11

「12:09 イエスがそこにおられるのを知って、ユダヤ人の大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。12:10 祭司長たちはラザロをも殺そうと謀った。12:11 多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行って、イエスを信じるようになったからである。」

説教『信仰に伴う苦難』

◆私たちは先週の日曜日、愛餐会の後に教会全体協議会を持ちました。主題は「今、教会で必要なこと」でした。4人の兄弟姉妹が発題をされました。各自各様に問題意識をもつての発題で、よかったですと思います。その中で北教会にとって一番新しい久保渕博兄が教会の資料などをよく読まれて発題されました。その中でこの礼拝堂の座席数にも触れられました。3人掛けのベンチが1列で7つありますから3×7で21席、それが4列ですから、全部で84席です。今日も半分ほど空席があります。

◆この協議会のテーマを念頭において、今日の聖書の箇所を読む時、私たちにどのような指し示しが与えられるのでしょうか。最初からそういう設定でこの箇所を読んだのではありませんが、読み進むうちに、このテーマに対する大いなる示唆、示しを受けた思いがいたしました。只今、司会者によって朗読されましたように、9節にこうあります。「イエスがそこにおられるのを知って、ユダヤ人の大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった」と。わたしは、「今、教会に必要なこと」のみならず、常に教会に必要なこと、求められていることはこのことだというふうに思った次第であります。

◆つまりそこにイエス様がおられると聞いて多くの人々がイエス様のもとに集まって来たと言われています。しかし、それに続けて、「それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった」と記されています。つまりイエス様とラザロが一緒だったので、多くの人々が集まってきたのです。何度も申し上げていることですが、先週は「キリスト」＝「油注がれた者」という称号について説明いたしました。「イエス・キリスト」とわたしたちはお呼びいたします。「イエス」がイエス様の固有名であります。その意味は「神は救いなり」でした。ヘブライ語の名前があって、それがギリシャ語化したのが「イエス」という名前です。それに対して「ラザロ」という名前についても繰り返し申し上げました。「神は救い給へり」という意味でした。イエス様が正に「神は救いなり」という意味の名を持たれる御方であるならば、イエス様の居られるところには、その救いに与った者も、そこに居るはずであります。その両者が一対としてあるときに、そこに人々が押し寄せて来たとき、このように記されているのであります。ですから、救いを為さる方と救われた者とが、そこに一対としてある時に、正に、それが「神の救い」の力強い証しになるわけです。10節11節にこのようにあります。「祭司長た

ちはラザロをも殺そうと謀った。多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行って、イエスを信じるようになったからである」と。つまり伝統的なユダヤ教から異端視されているイエス様の方に皆がついて行ったのです。イエス様を信じるようになったのです。ですからこのラザロ一人の存在がいかに力あるものであったかということを聖書は語っています。

◆このヨハネ福音書を順次読んできまして、今日の所は短いのでありますけれども、ここで語られていることは私たちに對して大いなる指し示しであります。私はそのように読みました。今、イエス様とラザロに対する殺害の危機が迫っております。私は想像しまして、このあとこのヨハネによる福音書においては、「ラザロ」の名は出て来ません。今日ここに出て来るのが最後なのです。この後どうなったかということは、聖書は大いなる省略で書いておりません。一人の人生でも丁寧に書けば、とても 20 章や 21 章で書き切れるものではありません。

◆そういう意味で省略ということも当然あるのですけれども、私は「ラザロ」が出てこないことについてこんなことを想像しました。イエス様はこのあと、捕えられて十字架で死刑になるわけです。ラザロはどうなったのかということですが、イエス様の御業、死んだラザロが蘇らされたこの事実、その証拠を消すために、ベタニア村を焼き討ちにかける。そしてラザロをも亡き者にする。それくらいのことをしたのではないか。私が読んだ聖書関係の本で、そんなことを書いている本は一冊もありません。ですけれども、自分たちの利権を守るためには、イエス様＝「神は救いなり」というお名前を持つばかりでなく、正にその実態であられるその御方を冤罪で十字架に架けて死刑にした人たちです。それこそ「ラザロ」ごときは、これを消す方が、我々みんなのためになる。それで、ベタニア村を焼き討ちにする。それ位のことはしたのではないか。

◆いずれにしても、イエス様はこのあと、捕えられて死刑になります。そのようなことで、この世の悪はそのようなことはできますし、やりかねないわけです。けれども、たとえ、この二人を殺害できたとしても、この世のいかなる力も、二人を滅亡させることはできません。「一期一会」という言葉がありますね。生涯にただ一度の出会いのことです。イエス様とラザロ、マルタ、マリアの出会いは、生涯一度ということではありませんでした。イエス様はエルサレムの祭りで上京する度に、その行、帰りに、この3姉弟のもとで、善き時を過ごされたのであります。そしてその様な交わりを通して、イエス様の格別の素晴らしさを彼らは感じておりました。けれどもマルタもマリアもラザロも、本当に一期一会的なイエス様との出会い、或いは自分たちが思っていたよりもはるかに勝って、この方は本当に真実な方であられたのだということをお心に銘じたのは、もう一つの北のベタニアにおられたとき、「ラザロ危篤」をお知らせしても、イエス様はすぐに来てくださらなくて、お出でになった時には、ラザロは既に死んで、4日経っていたということでした。

◆けれどもそれはエルサレムに近く、3キロ程の、エルサレム郊外のベタニアで、そしてエルサレムを中心としてイエスを捕えて亡き者にしようという空気が既に強く、ずーっと広がっている。そういう状況の中にイエス様はベタニアに来てくださった。そして死んだラザロを起こしてくださった。ということをお心は経験したのです。その時に正に「一期一会」という表現が、真に当てはまる経験を彼らはしたと思います。イエス様は本当にお

名前の通りの方で、私たちを愛してその上のどんな犠牲も厭わないで、わたしたちを顧み、助けてくださるお方なのだ。そのようにイエス様が命がけで最後にベタニアに来てくださった時、愛であり、復活であり、命であられるイエス様に、この三姉弟は出会ったのです。

◆私たちの人生にも、もちろん恐れや悲しみや痛みがあります。それは人生に付き物です。しかしそれら一切を凌駕する慰めがイエス様によって与えられるのであります。もちろん私たちは、恐れや悲しみや痛みというのも、自分で蒔いた種を刈り取る結果として、そういうことがあるのは事実であります。蒔いたものは必ず自分で刈り取らなければいけなくなります。これには例外はありません。すぐにその結果が現れないことがあるでしょう。しかし、悪いことをして、罰を免れることは決してありません。

◆しかし人生には、理不尽な苦難を負わされることがあります。蒔いたものでない結果を、自分が犯したのではないのに、その結果を負わされるという、理不尽な苦しみというのもあるのですね。正にイエス様が負われた苦難というのは理不尽な苦しみの典型ではないでしょうか。それで私たちも理不尽な苦しみ、苦難に遭うことがあります。これも避けることはできないのですね。しかし、この世に起こることが、この世界に起こることが、ただ理不尽な苦しみのままで終わるものも、また一つもありません。理不尽の苦しみの中には秘められた神様の意図があると思います。

◆それで私が奉仕した最初の教会でのことを思い起こします。(なんで、どうして、こんなことがと思うようなことがありました。でもそんな中で、「あっ！イエス様がこんな自分のために理不尽な苦しみを負ってくださったのだ」と、ぱっと思い当たったときに、苦しみの意味が変わりました。「この理不尽な苦難の原因である、この人がいてくれたので、イエス様がわたしのために負ってくださった理不尽な苦しみの意味に、目が開かれたのだという経験を、まだ40歳にもならない若い時にありました。ですから私たちキリスト者にとっては当然蒔いたものを刈り取る苦難も、理不尽な苦しみも含めて、これは偶然ではなくて必然だ。そういうものとして苦しみがあると私は思いました。

◆けれども、「偶然」とか「必然」とかの表現さえも白々しい、理不尽な苦難を負うということは、キリスト者にとっては定めである。キリスト者にとって理不尽な苦難は幸いな運命である。それは神様の賜物である。もしそういう経験をわたしたちがしなければ、ついに、イエス様が何故に、理不尽にも、十字架に犠牲になられたのかということが解からずじまいで終わってしまう。そのことが解からずして、わたしたちの信仰はないわけです。

◆後の使徒パウロ、熱心なパリサイ派のユダヤ教徒サウロは、多くのクリスチャンを死に追いやった人です。そんなことがあっていいと肯定できるものでないですね。理不尽な苦しみもあっていいなどとも言えないわけです。けれどもパウロの例でも、そういうことが起こるのですね。そのパウロがロマ書8章の終わりから9章の初めでこう言っています。

「35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。36 『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配

するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。01 わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、09:02 わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。

09:03 わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。」正にこれがキリストにおける理不尽な苦難のゆえに救われたパウロの思いなのですね。ロマ書5章の3節では「苦難をも喜ぶ。苦難をも誇る」とさえ言っております。

◆先ほど申しましたように、ユダヤ当局者らは自らの權益を保持するためにベタニアぐらい抹殺するぐらいのことは企てかもしれません。しかしたとえそんなことが行われても、何ものも、主キリスト・イエスによってしめされた神の愛から私たちを引き離すことはできないのであります。初めに申しましたように、教会にとって必要なことは、というよりも、「それが教会」なのですが、イエス様と、イエス様によって救われた私たちが、本当にそこに同居している時に、それが教会なのですね。イエス様は一人ですべてのことをなさるお方であります。けれどもそうであるがゆえに、本当にその方を救い主として信じる者がイエス様の愛に捕えられて理不尽な苦難をも誇りとするというクリスチャンの気概がなければ、その信仰は本当だとは言えないのではないのでしょうか。

◆あのルターは、キリスト者を「小さいキリスト」と表現しました。大きな偉大なクリスチャンはおりません。しかしキリスト者はすべて「小さいキリスト」です。たとえ小さかろうが、キリストでなければ、本当にキリストに似た者でなければ、キリスト者ではないということです。キリストは「重荷を負って苦しむ者はわたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」と言われました。私たちも負いきれない重荷を負うことがあります。けれども、私一人で負うのではない。キリストが共に負うて下さるのです。キリストとくびきが一つである時に理不尽な苦しみさえ負うことができます。そして一步一步進むことができる。聖書に書かれていることは、これ以上高い目標はありません。イエス様が目標です。「神は救いなり」という御方と「神は救い給へり」という私が一対である時、そこに神います。ここに救いがあるということを感じ取るのではないのでしょうか。私たち一人一人がそうなる時に、この空いている席は埋まるでしょう。イエス様と共に理不尽な苦難の軛を共に担うことを許されている。これに優る幸いはありません。

#### ◆お祈りいたします

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様

省みて、御前に誇るべき何ものも持たない者でありますけれども、あなたはそのような者と共に常に歩んでくださいました。今そのご恩寵を新たに覚えて感謝いたします。どうかわたしたち一人一人を、あなたに似た者とならせてください。

この祈り、イエス様のみ名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。